

令和2年度 経済・マネジメント学群AO入試

小論文 1/7

第1問

下記の文章は、菅 文彦「スポーツツーリズムと地方創生」林 恒宏・小倉 哲也著『スポーツツーリズム概論』（学術研究出版/ブックウェイ、2018年、105-111頁）の一節である。文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、作問の都合上、本文の一部を改変した。

日本の人口減少問題や地域経済縮小の克服等を意図して「地方創生」という政策キーワードが登場したのは2014年秋のことである。翌年に「まち・ひと・しごと創生基本方針2015」が閣議決定され、2016年から施策が本格的に推進されている。

「地方創生」は、「地方における安定した雇用を創出する」を先頭に、「しごと」が「ひと」を呼び、さらに「ひと」が「しごと」を呼ぶ循環を作り、その循環を支える「まち」に活力を取り戻すことを意図している。

「地方創生」が政策課題となった背景には、急速に人口減少が進むとされる自治体の数が、全自治体の約半分にあたる896にのぼり、「消滅可能性都市」と名付けられて反響を呼んだことが挙げられる。

人口規模が小さく、急速な人口減少が見込まれる自治体において、果たしてスポーツ全般、とりわけスポーツツーリズム（スポーツ活動に参加したり観戦するために、日常生活圏内を離れて行われる旅行）が人口減少や地域経済の縮小を克服するために、何らかの役割を担うことはできるのだろうか。

従来の調査で、全国都道府県・政令指定都市・中核市・特例市に関しては、すべての自治体がスポーツによる地域振興に関心を示し、「アウトター（＝域外交流振興）効果」や「インナー（＝地域資産形成）効果」に期待を寄せていることが示されている。前者は、スポーツイベント開催などにより対外的に情報を発信し、交流人口の増加による経済効果や地域の知名度向上、イメージアップ効果などを指し、後者はスポーツイベントを媒介として地域のインフラ整備や人材育成をはかり、良好なコミュニティを形成するなど、生活の質を向上させる効果を指している。

人口規模が比較的大きい自治体では、スポーツに対する期待と役割が大きいとされる調査結果があるが、小さな自治体については十分に明らかにされていない。そこで、すべての消滅可能性都市の「地方版総合戦略」を文献収集して、スポーツに関連する具体的な施策の抽出を試みた結果、552の自治体で関連する記載が見られ、消滅可能性都市の約6割がスポーツに何らかの役割を期待していることが示唆された。具体的な施策数は合計1044件となり、これらに共通するワードのうち、「施設」（284件）、「大会」（227件）、「合宿」（181件）、「教育」（168件）、「生涯」（166件）が上位を占めた。同時に、施策内容と紐づく達成目標、つまり施策を通じて実現したい事柄を分類整理したところ、「健康」（287件）、「交流人口拡大」（223件）、「移住・定住」（55

令和2年度 経済・マネジメント学群AO入試

小論文 2/7

件)、「コミュニティ」(51件)が多く見られた。「健康」は、高齢者の健康づくりや健康寿命の延伸を示し、「交流人口拡大」は域外から来訪して交流する人口が増えることを指している。人口規模の小さい自治体では、スポーツを通じて、住民の健康づくりとともに、交流人口の拡大に高い関心を抱いていることが明らかになった。

そこで、いかなる施策を通じて交流人口の拡大を意図しているのかを判別するために、達成目標と施策内容のクロス集計を行った。その結果、「交流人口」に対しては、「合宿」(58件)、「大会」(51件)、「施策」(43件)をはじめ「地域資源」「競技」が目立つ結果となった(表1)。

表1 施策内容と達成目標

達成目標ワード → 施策内容ワード ↓	健康		交流人口		移住・定住		コミュニティ		人づくり	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
合宿	13	4.50%	58	26.00%	6	10.90%	1	2.00%	1	12.50%
大会	41	14.30%	51	22.90%	11	20.00%	3	5.90%	0	0.00%
施設	50	17.45%	43	19.30%	16	29.10%	16	31.40%	1	12.50%
地域資源	10	3.50%	22	9.90%	4	7.30%	0	0.00%	1	12.50%
競技	13	4.50%	21	9.40%	1	1.80%	2	3.90%	2	25.00%
教育	27	9.40%	9	4.00%	8	14.50%	9	17.60%	2	25.00%
体育	27	9.40%	7	3.10%	4	7.30%	4	7.80%	0	0.00%
クラブ	40	13.00%	6	2.70%	0	0.00%	10	19.60%	0	0.00%
生涯	66	23.00%	3	1.30%	5	9.10%	6	11.80%	1	12.50%
観戦	0	0.00%	3	1.30%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%
計	287		223		55		51		8	

「合宿」は、学生・実業団・プロチーム等の合宿受け入れを指している。「大会」はスポーツ競技大会やイベントの開催を示し、近年開催されているマラソンやトライアスロン大会、自転車レースなどはその典型であろう。「施設」はスポーツをする・見るための施策を指しており、合宿用の練習場やトレーニング施設、マラソン大会のコース道路といった諸施設の整備が挙げられる。「地域資源」は海や河川、山岳などを活用したアウトドアスポーツ愛好者の受け入れなどが該当する。合宿、大会・イベント開催、特定のスポーツ種目の愛好者の受け入れなど、ここに見られる施策内容は総じて「スポーツツーリズムの振興」と括ることができるであろう。つまり、人口規模が小さく、「地方創生」の推進の必然性がより高い自治体では、スポーツツーリズムによる交流人口拡大への期待が大きいことが窺える。

交流人口は、定住人口(地域に居住する人)との対比で扱われることが多い。人口規模の小さい自治体におけるスポーツツーリズムを通じた交流人口拡大の例として、愛媛県今治市(人口約16.5万人)は、同市と広島県尾道市をつなぐ「しまなみ海道」のサイクリングによる来訪者が増加し、その数は2011年の調査で年間17万人とされ、その数は年々増加の傾向にある。徳島県三好市(人口約2.7万人)は、吉野川上流域の急流を生かしたラフティングの振興の力をいれ、年間約3.5万人(2015年)の来訪者を得て、2017年10月にはラフティングの選手権も開催された。京都府笠置町(人口約1,400人)は、河川流域の岩場がボルダリングに適していることから愛好者に人気を博しており、その模様が映画化されている。いずれの自治体も、定住人口を上回る交

令和2年度 経済・マネジメント学群AO入試

小論文 3/7

流人口を得ていることが特徴的である。

(中略)

スポーツツーリズムによる交流人口の拡大は、宿泊や飲食、物産購入などの消費拡大等による経済効果、自治体の認知度の向上、来訪者と地元住民の交流による地域コミュニティの活性化など多面的な効果が期待される。経済効果の試算では、「しまなみ海道」で開催される大会イベント「サイクリングしまなみ」が6億2898万円、同じ愛媛県内の「愛媛マラソン」(松山市)が4億3635万円とされる(いよぎん地域経済研究センター、2015)。

自治体の知名度向上で有名な例は、2002年の日韓サッカーワールドカップでカメルーン代表チームの合宿地となった大分県中津江村(現・日田市)であろう。同代表チームが本番直前まで来日するか否かの騒動が起こり、マスメディアで連日取り扱われたことで「中津江」の地名はサッカーファンのみならず、多くの国民の知るところとなった。サッカーワールドカップ終了後も、中津江はサッカーをはじめ各種スポーツや、セミナー・学習塾など年間約3.9万人の合宿利用があり、スポーツイベント大会運営を支えるボランティアが地元の町内会などを通じて編成されたり、来訪者と地元住民の交流の促進が地域コミュニティの活性化に寄与している。

このように人口規模の小さい自治体でも、スポーツイベント・大会の開催や合宿誘致、スポーツ施設の整備、自然景観・地形を生かした特定のスポーツ種目の振興などを通じて、交流人口の拡大を実現している例がある。「地方版総合戦略」においてスポーツツーリズムを志向する自治体が一定程度存在する背景には、そうした成功事例の存在が指摘できる。

設問

- (1)スポーツによる地域振興に期待される効果について、160字以内で述べなさい。
- (2)筆者の、「『地方創生』の推進においてスポーツツーリズムが重要な役割を果たす」という主張の内容について、表1のワードを用いながら400字以内で説明せよ。

令和2年度 経済・マネジメント学群AO入試

小論文 4/7

第2問

下記の文章は、竹内 克『ニュージーランドラグビーが教えてくれた「人間力」の高め方』（株式会社ベースボール・マガジン社、2019年、104-110、167-168頁）の一節である。文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、作間の都合上、本文の一部を改変した。

ニュージーランドは、「Learning From Mistake（ミスから学ぶ）」の考えを国全体が持ち、セカンドチャンスやサードチャンスをだれにでも与える環境が整っています。年齢、性別、学歴などに制限されることなく、夢に向かって何度でもチャレンジすることができます。結婚して子供がいても大学に通ったり、長年務めた仕事を突然やめて畑違いの仕事を始めたり、スキルアップのために転職を繰り返したりといったことは日常茶飯事です。ラグビーでも、30歳を過ぎてからプロを目指したり、オールブラックス（ニュージーランド代表チームの愛称）への夢を諦めなかったりする選手がたくさんいます。

ニュージーランド人は、「Have A Fun To Do the Impossible（不可能への挑戦を楽しむ）」の精神を持ち、少しずつ成し遂げられていく過程を楽しみます。ニュージーランドは、チャレンジを後押しする体制が整っていて、たくさんの挑戦を自由に選択できる国なのです。子供の頃から、たくさんのチャンスを与えられます。受験がなく、宿題を出さない方針の小学校が多いので、放課後は遊び放題。趣味、スポーツ、家でゲームをするなど、自分のやりたいことを自分で選んでやっています。楽しくない、自分に合っていないと思えば、きっぱりとやめることも自由です。

今年はラグビーをやって、来年はサッカーをやって、その次の年は水泳をやるとの選択をしても、だれも何もいいません。「みんながやっているから、自分もやる」といった考えがないので、100人のうち99人がラグビーをやっていても、自分がサッカーをやりたければ、1人でもサッカーを選びます。

高校に進むと、自分の好きな科目を選択して勉強します。アートが好きな学生は、アートに関連した授業だけを受けても、単位さえとれば、卒業することができます。

ここまで記すと、ニュージーランド人は人生の自由を謳歌しているように感じられますが、「自由な選択」の先には、「自己責任」がしっかりとあります。「自由な選択」＝「自己責任」は、「Make A Choice（自分で選ぶ）」の方程式です。自分の選択が、たとえ間違っているとしても、楽しくなくても、自分が思うことと違っても、自分で選んだのであれば、自らが責任をとり、解決策を見つけて、自分の経験として次に生かさなければなりません。子供のときからいろいろなことを自由に選択してきた彼らは、たくさんの選択ミスを経験し、この「Make A Choice」の方程式を自然と身につけます。

ラグビーにおいても、たくさんの選択肢があります。ニュージーランドの選手にとって、最初に大きな選択が迫られるのは、高校卒業の際です。進学するのか、就職するのか、それとも卒業と同時にプロを目指すのかを自分で選ばなければなりません。

しかし、どの選択肢をとっても、だれもが目標とするオールブラックスを目指すことができま

令和2年度 経済・マネジメント学群AO入試

小論文 5/7

す。ラグビー強豪校の出身でなくても、地元のクラブラグビーからスタートし、クラブのプレミアアグレードで活躍すれば州代表に、州代表で活躍すればスーパーラグビーに、スーパーラグビーで活躍すればオールブラックスにと、ステップアップしていけます。無名の選手でも、夢を達成するチャンスが与えられているのです。

私が知っている選手は、高校3年生のときにはラグビー部の3軍でプレーしていましたが、卒業後も地元クラブチームでプレーを続け、5年後にニュージーランドのセブンズ代表に選ばれました。16歳でバスケットボールからラグビーに転向してプロになった選手もいますし、30歳を超えて初めてオールブラックスに選出された選手もいます。選択肢はたくさんあっても、将来こうなりたいとする目標を選ぶのは、自分自身であるべきです。そして、その選択に対して責任をとるのも自分自身です。人生経験が浅い若い選手は、目標達成のために何をしなければならないのか、それがどんなに大変なことなのか、何を犠牲にしなければならないのかといった、目標までのプロセスがよく分からないまま、深く考えることなく、将来を選択してしまうことがあります。最後に選ぶのはもちろん選手自身ですが、目標までのプロセスを選手に伝え、より効果的な選択をさせてあげるのは、コーチの役割です。

ここに、1年後にオールブラックスになりたいという選手たちがいます。その目標を達成するためには、ある選手は1年間に500時間の練習が必要で、別の選手は1年間に2000時間の練習をしなければならないとの分析が出たとします。そのとき、コーチは、目標までのプロセスをそれぞれの選手に明確に伝えなければなりません。

プロセスが不明確な状態で選手に夢を追いかけさせるのは、コーチとして失格です。プロセスが分かると、最初の目標から現実的な目標へと徐々に変化していく場合がありますが、それもすべて、選手が自分で決めることです。コーチは、選手の選択を尊重し、サポートすればいいのです。夢の実現に向けてどのようなプロセスが必要か、ときにはそれが厳しく、たくさんの犠牲を払わなければならないものであっても、コーチは、それを選手に明確に伝える必要があります。その上で、できるかできないかを選手自身が「Make A Choice」、つまり、自分で選択するのです。

「Make A Choice」と並び、「Choose Your Experience（自分の経験を自分で選ぶ）」という言葉もよく使います。目標に向かって努力した結果として、「いい経験ができた、最高の時間を過ごせた」と思えるかどうかは自分次第であるとの意味です。

どんなに努力しても、だれもが目標を達成できるとは限りません。結果がどうであれ、「目標に向かって努力する」経験を自分で選んだからには、その経験にも責任を持つべきです。「つまらなかった」、「無駄な時間だった」と愚痴をこぼしたり、人のせいにしったりするべきではないと思います。

トレーニングの時間は一日数時間なので、コーチがすべての時間を選手と一緒に過ごすことはできません。「いい経験ができた」と感じるためには、選手自身がトレーニング以外の時間をどう過ごすかを自分で決め、責任を持つべきです。

目標に向かって何かを選択すると、一方で何かを諦めなければならないことがあります。トレ

令和2年度 経済・マネジメント学群AO入試

小論文 6/7

ーニングのために家族との時間を削ったり、朝練をするために夜遊びに行かずに早めに就寝したり、ファストフードを食べたくてもサラダを注文したりと、夢をかなえるには、厳しい我慢が必要なときがあります。これを「No Sacrifice, No Gain (犠牲なくして、得るものはない)」といいます。

ニュージーランドでは、多くの選手が、プロになる夢を追いかけます。かなえた選手は、目標へのプロセスをだれかにいわれて選択したのではなく、それをすべて受け入れ、自分自身で「Make A Choice」したのです。だからこそ、どんな困難な目標に対しても、自己責任と高い意識を持って挑むことができます。自分で選択したことに責任を持って行動しているので、フィールドでは絶えず全力で戦わなければなりません。

ニュージーランドは、自由の国です。年齢や性別に関係なく、自分の夢に向かっていろいろなことに挑戦できます。そして、夢を自由に追い求める代わりに、自分の選択に責任を持ち、ときには犠牲を払わなければならないことをみんなが知っています。ニュージーランドの選手に「なぜ、ラグビーをしているのか？」と問うと、「ラグビーが好きだから」と自信を持って答えるのは、自分の「Make A Choice」に揺るぎない自負心を持っているからではないでしょうか。

(中略)

①レジリエンスを持つ選手は、どんなときも全力でトレーニングに取り組みます。結果に関係なく、全力いプレーをしよう、全力でトレーニングをしようという「Work Ethic」、つまり、ハードワークに対する倫理観が備わっているのです。

つらいハードワークは、できればやりたくないものです。なんとか逃れられないかと考える選手もいるでしょう。しかし、勝利とハードワークは、切っても切れない関係にあります。自ら進んでハードワークをする選手は、なぜ厳しいトレーニングをしなければならないのかを理解し、目標を達成するために、ハードワークを「Make A Choice (自分で選ぶ)」した選手です。そのため、彼らは高い「Work Ethic」を持ってトレーニングに取り組みます。

ニュージーランドでは、自ら進んでハードトレーニングをこなす「Work Ethic」は、スキルレベルが高い選手にも求められます。このような選手は、どんな逆境にしようとも、諦めずにハードワークをこなすことができる強靱なメンタルを持っています。彼らには、ハードワークをこなしてきたという自信がみなぎっています。

令和2年度 経済・マネジメント学群AO入試

小論文 7/7

設問

- (1) 下線部①レジリエンスとは何を指しますか。文中の語句を用いて 50 文字以内で答えなさい。
- (2) 本文は、ニュージーランド文化の中で育まれる「Make A Choice」の精神が描かれています。
- (i) あなた自身が「Make A Choice」した経験を、200 文字以内で述べなさい。
- (ii) 文中にあるような自由を尊重するニュージーランドのスポーツ文化について、あなたは賛成ですか。反対ですか。その理由も合わせて 250 文字以内で述べなさい。